

工匠館第6回特別展 小林英夫作品展

江戸切子 —その技と美—

たくみ
工匠番館では、来る8月21日から29日までの間、特別展を開催します。第6回目を迎える今回は、江東区指定無形文化財（工芸技術）保持者の小林英夫さんの江戸切子を展示します。

展示にさきがけ、江戸切子の歴史と技術についてここでご紹介します。



江戸切子は、ガラスの器などの表面に、様々な文様を刻み込む方法です。幕末期に繁盛した江戸ギヤマン問屋加賀屋の手代文治郎が、大坂のビードロ師和泉屋嘉兵衛のもとで修業し、江戸では、天保年間（1830頃）より行われたと伝えられています。嘉永年間には、鹿児島でも江戸の職人を呼んで切子を造り、薩摩切子などが普及しましたが、江戸切子の特徴は、カットが深く鋭いこと、多彩な文様が

あり変化にとんでいることです。文様には「籠目」「魚子（ななこ）」「クモの巣」「亀甲」「笹」や菊・麻の葉などの植物を圖案化したものなど、江戸の生活用品などに題材をとった模様が使われ、江戸文化を表現しているといえます。明治時代になり、すぐれたガラス生地が開発され始めると、江戸切子の製作は一層盛んになりました。現在のようない切子が作られるようになったのは、明治6年（1873）に官営の品川硝子が設立され、明治15年には英国人エマヌエル・ホーブツトマンが指導者として招かれ、数名の日本人がその指導を受けるようになったことからです。小林英夫さんは、大正12年に本所菊川町（墨田区）に生まれ、大学卒業後、父親の菊一郎氏のもとで修業を始めました。菊一

郎氏は、エマヌエル・ホーブツトマンから技術指導を受けた大橋徳松氏のもとで修業をし、技術を受け継いでおり、英夫さんはいわば直系といえます。平成5年度に江東区指定無形文化財（工芸技術）保持者として認定されました。その他、東京都優秀技能賞、労働省卓越技能賞など、さまざまな賞を受賞され、江戸切子の第一人者です。最近では、森下文化センターの切子教室をはじめ、修学旅行で訪れる中学生の体験など、普及にも力を注いでおられます。江戸から伝わる幾何学的模様のカットによって、虹色の光沢を放つ江戸切子の美をじっくりとご覧ください。



会期 8月21日（土）～29日（日）
午前9時～午後5時
会場 工匠式番館（森下文化センター）
2階、森下3-12-17
入場無料
※21日・22日は江戸切子の実演があります。

下町文化

NO.
206
1999.7.15

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

- 工匠館第6回特別展
小林英夫作品展
江戸切子—その技と美—
- 文化財保護推進協力員
新たに20名を委嘱
- 城東のくらし
—平成10年度民俗調査から—
- ◎ 芭蕉記念館新展示
芭蕉の書 芭蕉の肖像
天保の三大家
- 江東歴史紀行
★ 中世亀戸村の庚申講
- ここにも歴史があった
★ 手違い鋳

文化財保護推進協力員

新たに20名を委嘱

協力員制度も、発足してから今年度ではや8年目を迎えます。教育委員会では、4月14日に新たに20名を委嘱いたしました。昨年度の委嘱者の方々とともに、区内の文化財保護・普及にご協力をお願いすることになります。

文化財保護推進協力員とは、地域の歴史的・文化的遺産である文化財を保護するため、調査・普及などにご協力をお願いする方々です。その活動内容は、(1)有形文化財(石造物など)の調査、(2)町並み変化を写真で記録する、(3)史跡めぐりガイド、(4)10月に本場公園で開催される民俗芸能公開(角乗・力持など)での会場設営や警備など多岐にわたります。いずれも文化財の保護・普及には大事な仕事といえます。

2年任期で、計40名の協力員は、教育委員会によって年22回程度開催される「文化財保護推進員講習会」を修了



委嘱式の様子

され、江東区の歴史・文化財の基礎的な知識を修得された方々を対象に募集いたします。そして、応募者の中から20名の方に委嘱をいたします。この制度のもっとも特徴的なことは、一般の区民が文化財の保護活動に携わることにより、文化財への理解をより深める機会になるということではないでしょうか。現在では、協力員経験者のみならず、数十名の区民による自主グループが結成され、文化財愛護に積極的に取り組む姿も見られるようになりました。

文化財といえは、奈良・京都がすぐに頭に浮かびますが、現在区内に残されている多くの文化財も、その一つひとつが歴史の証であり、財産といえます。その意味では、地域の人々にとって同じように重要であることにかわりありません。また、今の時代につられてはいるさまざまなものも、いずれは歴史的遺産としての文化財候補といえるでしょう。そこに刻まれた文字や、文化財が生まれた背景を知ることが、文化財や地域の歴史を知るうえで欠かすことができません。

数十年・数百年という長い間、地域に住んだ人々により伝えられてきた文化財。協力員の方々には、そのような文化財の調査協力などをお願いいたしますが、皆さんの家の回りにも、きっと何かあるはずですよ。日頃、少しでも気に留めておくと、何か新しい発見があるかもしれません。

平成十・十一年度委嘱者

浅野 清(大島)	小島 道子(清澄)
安心院 研(南砂)	斎藤 恵子(千石)
大塚 栄一(亀戸)	佐藤 幸子(亀戸)
大沼 千早(東陽)	鈴木 英子(豊洲)
小笠原淑夫(豊洲)	田中 嘉明(扇橋)
岡本ヨシエ(塩浜)	菱本 宏(大島)
川村昭治郎(北砂)	福井 穂積(平野)
北川 房枝(北砂)	松澤 弘治(高橋)
北村儀一郎(東陽)	安田 武恒(南砂)
小久保 良(東陽)	吉藤 賀好(北砂)

平成十一・十二年度委嘱者

池田 英子(南砂)	庄司 菊江(東砂)
石見羽津映(海辺)	竹田 一郎(越中島)
伊東 義男(東雲)	田村 誠一(木場)
今井 トキ(大島)	土屋 正躬(枝川)
岩松 精(高橋)	戸田 政徳(東砂)
植村 學(東陽)	長倉 眞生(白河)
小笠原 将(東陽)	松本 敏子(猿江)
小澤 健一(北砂)	水井 一男(東陽)
加藤 朝子(亀戸)	宮本 和子(東陽)
斎藤 欣弥(東陽)	山科 義郎(白河)



班別打合せ

次に、新たに委嘱をうけた方々のうち、4名の方に任期中の感想や今後の抱負などを語っていただきました。

温故知新

海辺 石見 羽津映

私の育ちました深川。この大好きな深川を、知人の紹介により協力員というおこがましい立場で改めて勉強させて頂いております。

そんな中、各年代の絵図より過去との連繋に開眼した時、又、薄紙を一枚一枚はがしていくような私自身のたよりない作業の中鮮明な映像が見えた時は、なんとも言えない興奮を覚えます。そして協力員の仕事のひとつ、定点観測のそれはさいたるもので、写真付きの新しい地図となり、まさに情報量のものとも多い情報媒体として残ります。街は記憶してくれています。時代を異にし、後に誰かが又この絵をひもとき、現在の真相をつかみとってくれる

かと思いますが、自分達の町への愛着もひとしおとなり、改めてシャッターを押したいと思います。

協力員がんばります

北砂 小澤 健一

「江東区に訪問して拝観するような文化財はありますか？」と尋ねられて困惑することがあります。仏像・美術品とか古い建築物、考古学遺跡等が極めて少ないのです。我が江東区では登録された文化財は石碑・石造物が多く中には墓石も文化財なのです。

過去二度の震災・空襲の被害を受けた歴史も文化財の内容の他地域との異質性もあるでしょう。然れども「下町文化」の脈々とした底流も確実にある所が江東区なのです。

私も協力員活動が今期で三期目になりました。地域史跡巡りも次期で一巡します。ガイド役の心掛け（説明内容も説明の態度・度胸も）も先輩諸氏か



史跡めぐりのガイド役



角乗会場の設営

ら手ほどきの賜り物です。

又、区の行政姿勢への生意気な意見の一つ二つも言えるようになりました。でも何よりも区内にある「文化財」「文化の薫り」に直接触れられること。そこから古の人々の呟きも聞こえてくるのは魅力でさえあります。

区民の立場としての学芸員並の勉強と歴史遺産への愛護心で協力員がんばります。

文化財保護の勉強を通して

東陽 宮本 和子

私は、歴史の教科書で学んだことは知っていても、実際この地で何があったのか、この墓はどう言う方のものか、恥ずかしい事ですが何も知りませんでした。それが江東区文化財保護の勉強をするようになってから、物を見る目が変わりました。そして歴史を証

明する事、又新しい発見等、次々に感動し勉強させて頂きました。今でも毎日が情熱にもえて暮らしているみたいで、何故もつと早くこの勉強をしなければのかと悔やまれます。

江東区は素晴らしい方法の勉強をしていると、数年前都にほめて頂いた事もありました。各々素晴らしい長所をもった方達の勉強で、私等教えられる事が多々ありました。又毎日のように新聞やテレビで報道される日本の遺跡、文化財の発見に、ささやかな力しかない私でも、この先解明されていくであろう歴史や考古学が楽しみです。又鉄銅を溶かした場所の跡等、北方民族南西民族の知恵に感謝し、各地の歴史を尊び保存したいと思います。

協力員活動は楽し

東砂 戸田 政徳

研修当手を振りかえると、初級では聴くもの見るもの考えること全て初体験でした。

文化財に関する学習が進み、親睦も深まり、博物館巡りでは見聞を広め、我が区の資料館はこんな風にと夢を描いたものでした。

中級では研修テーマを決めるのに理想と実現可能な間を幾日も揺れ動いていたことが思い出されます。協力員活

動に入ってから、定点観測の「町並みとは何か」で今も悩んでいます。文化財では昭和三十年代の写真整理を手伝った折りに、記録の重要性和共に少し理解出来たような気がしています。

現況確認調査では先人達の貴重な文化遺産に触れることで、昔を偲び勉強することが出来ました。区民文化祭では、江東区の誇る無形文化財を、遠来の皆様に紹介する手助けをしたりと結構多忙な活動が続きます。また、史跡巡りでは、研修を受け、資料を集め、実踏もしていざ本番で間違えると云うことを重ねながら少しづつ成長するようです。また、楽しいのは行事の終わったあと皆でコーヒー（麦酒）で反省と理解を深めながら郷土愛を高めるのもまた良き哉と考えます。

今後もお互いに協力しあい、楽しい活動が続けて行きたいと思っておりますので今後ともご指導をお願い申し上げます。



文化財の現況確認調査

城東のくらし

—平成10年度民俗調査から—

江東区教育委員会は、昭和59年度より、区内をいくつかのブロックに分けて総合的な民俗調査を行ってきました。

平成10年度以降は、これらの成果をもとにして、区内を大きく深川・城東の二つの地域に分け、それぞれで調査を行うことにしました。

10年度は城東地域で行いました。ここでは、調査成果のなかから一部をご紹介します。

Ⅱ昔の装いⅡ

○普段着

木綿の着物で袖は元禄袖で、夏は浴衣、寒い時は衾あふせを着た。また「重ね」といって二枚重ねて着た人もいた。真冬は衾の綿入れや着物の上にツツポツツポ（筒袖）の半天を着ることもあった。帯は半巾帯だった。家事をする時は着物の上に割烹衣なすきを着たり、襷たすきをかけた。衾に繻子の黒衿しほすをかけた人もいた。

普段着でも木綿ではなく、メリンス（毛織物）や新銘仙（絹糸とガス糸と呼ぶ綿糸の混紡か、ガス糸のみで銘仙らしく織った物）や銘仙（絹織物）の着物を着て丸帯や名古屋帯をお太鼓に結んでいた人もおり、結婚前の女性に多かった。男性も木綿でツツポ（筒袖）のメクラジマ（紺無地）の着物などを着ていた人が多かった。

昭和に入ると、夏は

洋服という人も出てきたが、ほとんどの人が洋装になったのは、モンペや国防服の戦中を通して戦後のことである。

○仕事

農業や海苔業の人は、男性は半天に股引きで腹掛けをする人もいた。大正4年砂村生まれの人の話では、股引きは足袋屋に作ってもらったという。海苔作業は寒い冬に行うので、濡れる右手には着けないが、左手には手甲をした。畑作業には、地下足袋をはいた。



足袋屋で買い、昔は足袋の裏にゴムが付いただけのもので、1足1円50銭くらいだったが、昭和に入るところになると、ゴムの部分が上までかかる今のようになったという。

八百屋さんが市場へ行く服装は、半天・股引き・腹掛け・地下足袋。

運送業で馬を引く人は（昭和の初めころ）、半股引きをはき、腹に晒さらしを巻き、半天を着てしごきを締め、白足袋・白手甲・脚半を着けた。また別の人は腹掛け・股引き・半天を着て地下足袋をはいたという。

昭和初期のサラリーマンは、工場勤めの時は、詰め衿の洋服に短靴で通勤し、工場では菜っ葉服（青色の仕事着）に着替えて仕事をした。事務所勤めに変わってからは、ワイシャツに背広を着て、夏はカンカン帽で冬は山高帽をかぶった。

職人さんは腹掛け・股引き・半天姿で草履や下駄をはいた。

○婚礼の衣装

昭和10年頃の写真である（右下）。花嫁は亀戸生まれ、花婿は他府県出身のサラリーマン。花嫁側のいとこの紹介による見合い結婚のお二人である。上野の池の端の料理屋で式を挙げた。花嫁は自分で縫い上げた江戸褌を着、花婿はモーニングを着ている。



同じ頃に結婚した亀戸の男性は、香取神社で挙式し、亀戸の料亭で披露した。婿はモーニング、嫁は島田を結って振り袖を着た。また昭和4年に結婚した、やはり亀戸の男性は、式は香取神社で、披露は砂町にある割烹料理屋だった。婿が紋付きを着て、嫁は江戸褌を着、角隠しをした。同じ年に結婚した東砂の女性は、婚家の本家の広間で式を挙げた。花婿は紋付き袴、花嫁は高島田に黒留袖（母が3円50銭で作ってくれた）を着た。

大正12年に結婚した亀戸に住む女性は、式は飯田橋の東京大神宮で挙げ、その時は振り袖を着た。その後、披露宴は浅草の草津という店で行い、その時は模様と呼んだ江戸褌（留め袖）を着た。もっと時代が遡った大正末に結婚した砂村生まれの女性は、式は嫁家で挙げた。最初は江戸褌を着て、お色直しに無地の着物に着替えた。

Ⅲ食べ物Ⅲ

○子供のお弁当

子供の弁当箱は、大正時代は瀬戸引（鉄製のものにホーローをぬったもの）だったので、瀬戸がはげると臭くなるのでイヤだったという。そのあとアルミニウムのもものになった。

おかずは鱈節や海苔が入れば、ご馳走だったという人もいれば、にわとりを飼っていたので卵焼きを入れたとか、海苔は自分の家で作っていたのでいつも食べていたという人、あるいはご飯だけ詰めていき、学校の前の煮豆屋でおかずを買ったという人、ご飯の上に干しイカの焼いたのを細かく裂いてのせていくと、食べるときはやわらかくておいしかったとか、ご飯の真ん中に梅干しだけだったとか、芋の煮物などいろいろであった。

○おやつ

農家では、明治45年生まれ的女性は、子供の頃、家から離れた所にあつた田へ「おやつ」を届けに行った。おむすびとたくわんで、やかんにお茶を入れていったという。

東砂でもさつまいも、とうもろこし、あられ、味噌やゴマ塩をつけたおにぎりを食べたという。

子供の時には、竹の子の採れる頃は、皮に梅干しや味噌を入れてなめた。6月になると、川つぶちのグミの実を、8月には蓮の実を食べた。蓮田の中に

入って採るので、蓮の芽をかくといつて見つかるのと叱られた。実が青い頃にとつて、甘皮をむいてそのまま食べた。甘味があつておいしかったという。人によつては煮て食べるものと甘くておいしいと言う。同じ8月に池の藻の下に付いている菱の実をやはり青いうちに採つて、皮をむいて食べた。秋になると柿を食べた。余談であるが、亀戸に住む女性には明治43年の大水以来、その家の柿などの「なりもの」に実が付かなくなったという。冬になるとキンカンの実を食べた。

買つて食べるおやつは、大正時代は焼き芋をよく食べたようである。今の石焼き芋ではなくて、平たい釜（鉄製）に芋を切つて並べて焼いてゴマを振つたものである。夏はふかし芋だった。

亀戸では町内に必ず2、3軒は焼き芋屋があつて、3時になると、わんさと人が来たという。1銭で大きな焼き芋が4本きた。同じ頃、あんこ玉とかんが5厘で、焼き大福は1銭、高い大福は2銭だった。船橋屋の葛餅は1皿2銭だった。また行商で頭の上にタライを載せて、その中にあめを入れて歌をうたつて売りにくる、「よかよかあめや」からも買った。

東砂ではおやつのことを「たばこ」とも言い、ともにひと休みという意味

が込められているのであろう。ここでも駄菓子と呼んだ、あめ玉、あんこ玉やあんぱん、ビスケット、せんべい、おこし、かりんとう、紅梅やき、きび団子、きび餅などを買つて食べたという。きび団子については、明治41年大島生まれの男性は、白を持ってきたて、長屋のところでついて売っていたのを覚えていた。

南砂では、食パンを三角に切つて黒みつを付け、竹串に刺してあるのを1銭か2銭で食べたという。少し時代が下ると、昭和3年頃の子供のおこづかいには、1日2銭もらえれば良い方だったといひ、駄菓子屋で今川焼きやたいこ焼きを買つて食べたり、ドンド焼き（お好み焼き）屋が屋台を引いて来たので、そこでいか天や野菜天を食べたといひ。

○飲み水

亀戸では、水質のよい井戸もあり、



明治末の水売り

他地区より井戸水を飲んできた人が多かった。しかし赤い水しか出ないので飲料水は買い、洗濯や洗物や風呂の水は井戸水を使ったという人もいる。米をとぐのは井戸水でも、最後の仕上げや炊く水は買った水を使ったという。水屋のゲンさんが亀戸では有名で、この人から買った。この人は江戸川の方から水船で水を運び、それを売って歩いていた。樽を前後に担いでいた。樽1銭だったという。当時1銭で大福が1ヶ買えた。水の買えない人々は、井戸水を棕櫚（しょうろ）の皮と白砂でこして飲んだといひ。

砂町では、井戸水は塩辛く、ビールやすいかを冷やすのに使つた。飲料水は水売りから買った。米は川の水でといてから買った水でといひだといひ。また水売り船については、代官堀川に水売りの船が来て、船へ板を渡して、天秤で前後に桶を担いで水売り歩いた。家が代官堀川の土手下にあつた人は、直接船に買いに行ったという。1杯2銭くらいで、家にカメがあり、これに何升も入れた。家に井戸があつたが、その水はこきないと駄目なので、砂を入れてこして、洗物に使つた。2桶を1荷と呼ぶが、それで一家族の2、3日分になったという。1荷3銭だった。

芭蕉記念館 新展示

◎芭蕉の書

◎芭蕉の肖像

◎天保の三大家——梅室・蒼虬・鳳朗——

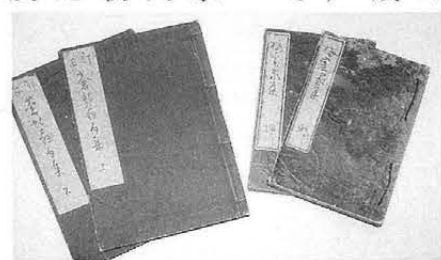
6月18日(金)から公開中

江東区芭蕉記念館(常盤1-6-3)では、6月18日(金)から新展示になりました。2階展示室右側の展示ケースでは「芭蕉の書」・「芭蕉の肖像」を、左側の展示ケースは、「天保の三大家——梅室・蒼虬・鳳朗——」を企画しました。

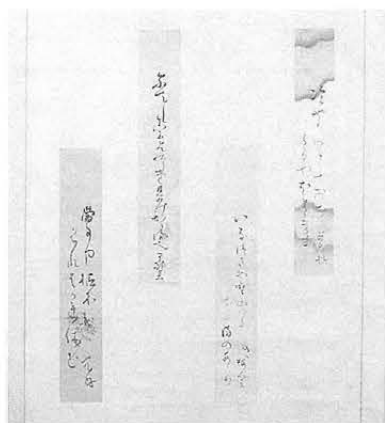
天保期の俳諧は、化政期から引き続き創造性を欠いた月並調の俳風に堕したものの、俳諧は庶民の中に一層ひろまります。芭蕉150回忌にあたる天保14年(1843)頃には、全国的に芭蕉の句碑が建立され、また芭蕉は「花の本大明神」の称号を贈られ、さらに権威化・神格化していきました。このような、天保期の俳壇において三大家と称され、多くの門人を輩出した

のが、京都の桜井梅室・成田蒼虬、江戸の田川鳳朗です。

今回の展示は、この三人の短冊と書状を貼り込んだ軸を初めて展示しています。平板・無技巧を旨とし、芭蕉晩年の炭俵調の俳風を受け継いだ、天保期の平明な俳諧をご鑑賞ください。



『蒼虬翁句集』上・下 『梅室家集』乾・坤



梅室ほか俳人短冊貼り込み幅(部分)

「芭蕉の書」では、元禄4年(1699)正月三日付で、加賀金沢の門人句空に宛てた、芭蕉の書簡を展示しています。句空は、芭蕉が「奥の細道」の旅の途次、金沢来遊の際に入門した北越



句空あて芭蕉書簡

蕉門の重鎮。文面では、句空・北枝らが出版を予定していた俳諧集『卯辰集』に關して、拙速を戒め自分のもとで新しい俳諧の風雅を

究めてからにしようにと勧めています。他に、「朝顔に」発句画賛(一蝶画)、「ほろほろと」発句画賛(許六画)、「葛の葉の」発句自画賛、「幻住庵の記」卷子、(以上四点複製もご覧いただけます)。

「芭蕉の肖像」では、蕪村筆 芭蕉坐像図や、呉春筆 芭蕉胸像図、松濤筆 芭蕉と蕉門十哲図(三幅対)を展示しています。

蕪村は、天明期の俳画壇の中心人物で画は狩野派を、俳諧を巴人に学び55歳で師の夜半亭を継承し俳諧宗匠となりました。作品は安永8年(1779)

蕪村64歳の作、僧衣をま



呉春筆 芭蕉胸像図

とったふくよかな芭蕉が描かれています。

呉春は、蕪村に俳諧と画を学び、四条派と呼ばれる文人画の中に写生の技法をとり入れた新しい画風で、京画壇の中心となりました。作品は、寛政5年(1793)の作。今年の芭蕉記念館のオリジナルテレホンカード(頒価800円)の図柄にもなっています。皆さんの芭蕉のイメージはどちらですか、ご来館をお待ちしています。

「芭蕉記念館」

開館：午前9時30分～午後5時
休館日：月曜日(芭蕉史跡展望庭園は第2、第4月曜のみ)

入場料：大人100円

小中学生50円

交通機関：都営地下鉄新宿線森下駅下車 徒歩7分

問合せ：芭蕉記念館

江東区常盤1-6-3
☎(3631)1448

江東歴史紀行

中世亀戸村の庚申講

区内の庚申塔

江東区には、龍眼寺(亀戸3)の万治2年(1659)造立のものを初見として、計三十基の庚申塔が現存しており、江戸時代における民間信仰「庚申信仰」を偲ばせてくれます。庚申塔以外でも、明治通りから釜屋堀庚申様地藏堂(大島1)の旧地へ向かう東西約350mの道路は庚申道(大島1-17-38)と呼ばれていましたし、現在でも地藏堂や子安庚申堂(大島8)は地域において厚くお祀りされており、今も昔も身近に生き続ける庚申信仰の姿を伝えていきます。

庚申信仰とは、六十日に一度廻ってくる庚申の夜に三戸の虫が人間の体内から抜け出し、その人の罪を天帝に告げ口するという中国道教の教えに由来しています。これを防ぐため、人々は一箇所に集まって酒食や談笑をして徹夜をします。この行為を庚申待^{まち}と言ひ、その集団を庚申講と呼んでいます。庚申塔は庚申の日に夜通し起きていたことを記念する民間習俗の産物なのです。

江東区の庚申塔は、深川方面に二箇

所・十基、城東方面に十四箇所・二十基現存しており、やはり圧倒的に農村地帯の城東方面に多いことがわかります。

区内の近世庚申塔については、富永文昭さんの詳細な研究があります(「庚申塔についての考察」『江東ふるさと歴史研究』一)。富永さんの研究によれば、紀年銘がある二十二基の庚申塔のうち、64%が1661年から1705年までの45年間に造立されているということです。本尊については、古い形式とされる三猿が八基、最も一般的な青面金剛が十八基、阿弥陀が二基と分類でき、神道系の猿田彦は存在していないこと、また蓮華紋や願文などから、区内の近世庚申塔は仏教色が強いということが指摘されています。

ところで、次に注目したいのが、寛文8年(1668)在銘庚申塔(亀戸普門院)と延宝4年(1676)在銘庚申塔(亀戸光明寺)の二基が、本尊に大日如来の種子(バン)を刻んでいることです。これは庚申塔に先行する中世庚申待板碑の影響であろうとされています。

失われた庚申待板碑

実はこれに関連して、注目すべき史料があります。江戸時代末期の随筆『天野政徳随筆』巻一(『日本随筆大成』三期四巻)に次のような記述が見えます。

今の本所・深川などの地は、皆海の中にて、洲の付きたる地の次第にひられしならん。昔より亀戸は人家も有りてひと里なるべし、其証は、今亀戸の香取明神の社の近きほとり、百姓へ名を失すの持地の内に所建庚申供養塔有、すりて蔵したればここに縮写して出す、

堅曲尺二尺一寸 横七寸五分

「彦三郎小二郎 彦太郎

四郎五郎 八郎二郎

(サ一) 大永七年丁亥

(キリ一ク) 奉庚申待供養

(サク) 十月十六日

衛門二郎左近太郎 小六

与太郎彦三郎彦太郎

此供養塔有を以て見れば、大永には亀戸村ありて人の住し事明けし、宗長の紀行(「東路のつと」)永正六年



亀戸光明寺の庚申塔

(1509) よりは此塔は十九年後の物也、此の塔の外には亀戸村に古物なし。証とするに足れり、(括弧内は筆者注)

随筆の作者・旗本天野政徳は、香取神社(亀戸3)の近くに立っていた大永7年(1527)の供養塔をもって亀戸が古くよりの陸地であったことの証拠としています。現在この供養塔は見当たらず、現物を確かめることは出来ません。しかし、幸いにも天野の拓本から、供養塔は中世の遺物「板碑^{いたび}」であったことがわかります。

板碑とは中世に盛んに造立された、板状で石製の供養塔の一種です。なかでも埼玉・東京地域に濃厚に分布する武蔵型板碑は秩父原産の緑泥片岩^{りよくでいへんがん}を材質とし、山形の頭部に二筋の直線を横に入れるという特徴があります。現在、江東区内には地元伝来の板碑は無いのですが、葛西地域(葛飾・江戸川・墨田区)は武蔵型板碑分布圏に含まれ、天野の拓本には確かにそうした特徴が窺えます。そしてここで注意したいのはこの板碑が中世の庚申信仰を示す庚申待板碑であるということです。

さて、庚申待板碑は文明3年(1471)の川口市実相寺所蔵の板碑を初見とし、十五世紀から流行してきた民間信仰板碑の一種で、足立区などの荒川

下流域に濃密な分布を示しています。

亀戸の板碑は、関東地方では十一番目に古い庚申待板碑のようです(諸岡勝編「庚申待板碑編年一覽」足立区立郷土博物館「あしもとの文化財でたどる室町・戦国時代」)。当時、荒川も一部流入していた中川(古利根川)の河口亀戸に、そのような行為をし、板碑を造立した人々が存在したのです。そういえば区内近世の庚申塔も、亀戸地区に七基も集中し、十七世紀半ばを中心とする比較的早い時期のものがその大半でした。亀戸の庚申信仰には長い歴史があったと言えます。

亀戸村の農民

更に拓本を詳細に見てみましょう。

阿弥陀三尊(阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩)の種子を囲んで、上に天蓋・瓔珞、下に三具足(香炉・燭台・花瓶)と前机が彫り込んでいます。なかなか立派なものと言えるでしょう。法量は縦約63センチ・横約23センチになりますから、最大では1メートル60センチにもなる庚申待板碑のなかでは中位の大きさになるでしょう。か。

永7年といえ
ば戦国時代真
つ只中で、2
年前には、小
田原北条氏二



『天野政徳随筆』巻一より

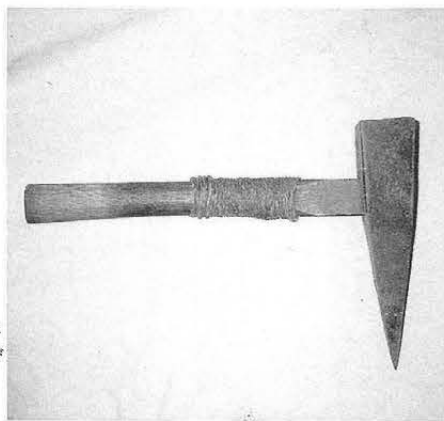
代氏綱が葛西城(葛飾区)主大石石見守を攻め込んでいます(上杉文書)。

それにしても注目すべき点は、通常はなかなか史料には現れてこない中世民衆の名前がわかることです。彦三郎・小二郎・彦太郎・四郎五郎・八郎二郎・衛門二郎・左近太郎・小六・与太郎・彦三郎・彦太郎という十一名はおそらく亀戸村の上層農民と考えられます。彦太郎さん・彦三郎さんは二人も見え、当時有りがちな名前だったのでしょう。彼らは日々の仕事に追われ、戦火に怯える日常の中で、庚申の日に夜を徹して楽しい宴会をし、それが成就した記念碑としてこの板碑を造立したのではないのでしょうか。

中世史料のほとんど無い江東区にとつて、現存しないとはいえ、随筆に載せられた拓本は非常に貴重な情報です。同時に、庚申信仰を媒介にした、中世と近世を結ぶ貴重な史料と言えます。ところで、この板碑は一体どこへいったのでしょうか。

(文化財専門員 今野 慶信)

ここにも歴史があった



右の写真のハンマーは、木挽き職人が使う道具の一つで、手違い鉋といひます。

木挽きでは大鋸(199号で紹介)と呼ばれたノコギリが不可欠ですが、職人みずから伐る木にあわせて

歯の具合などを調整(目立て)します。伐るうちに大鋸が曲がってしまったり、切れが悪くなるとそのつど目立てを行います。様々な木を伐る木挽き職人にとって大鋸の目立て作業は大事な作業です。その目立てに使う道具の一つが手違い鉋です。

手違い鉋は大鋸全体の歪みを取るために使います。先端が横長で、ここでまず横方向の曲がりを直してから、90度角度が違った反対側で縦方向の歪みを直します。両方を使うことで均一な面になります。

ご紹介した手違い鉋は、三好2の多賀武さんから寄贈いただきました。

しい日々が続きます。私の休日はいったいどこへいったのでしょうか。

計報

江東区登録無形文化財(工芸技術・漆工)保持者近藤良市氏(61歳、東砂5-8-6)は、去る6月10日に逝去されました。慎んで追悼の意を表します。

今回の工匠館特別展は、小林英夫さんの江戸切子です。ガラスに刻まれた光の芸術をお楽しみください。また、協力員の活動も本格的に始まりました。先日の地区別講習会では、雨天のため史跡めぐりが中止になってしまいました。たが、スライドを使った講義で、協力員の方々が熱弁をふるっていました。それにしても、事業のフル回転で忙